



Risk factors of problem drinking in the chronic phase among evacuees in Fukushima following the Great East Japan Earthquake based on a two-year cohort study: The Fukushima Health Management Survey

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2019-12-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上田, 由桂 メールアドレス: 所属:
URL	https://fmu.repo.nii.ac.jp/records/2000279

論文内容要旨

しめい 氏名	うえだ ゆか 上田 由桂
学位論文題名	Risk factors of problem drinking in the chronic phase among evacuees in Fukushima following the Great East Japan Earthquake based on a two-year cohort study: The Fukushima Health Management Survey 東日本大震災後の避難住民における問題飲酒になる要因 2年間の前向きコホート研究：福島県県民健康調査
【目的】 先行研究では、震災後における問題飲酒と精神健康に関連があると報告されている。しかし、震災後、どのような危険因子が問題飲酒の発展に関連するかについては明らかでない。本研究は、前向き研究を用いて東日本大震災後の慢性時期に、避難住民における問題飲酒になる社会心理的要因及び生活習慣を男女別に明らかにした。 【方法】 集団ベースの縦断的研究 東日本大震災後に避難区域指示になった13市町村の避難住民に「こころの健康度・生活習慣における調査票」を送付した。本研究の対象者は、調査票を送付した2012年・2013年ともに回答した20歳以上の22,774人とした。その対象者のうち、自身で調査票を回答しておらず、かつアルコール依存症尺度(CAGE)を無回答者は除外したため、分析対象者は12,490人となった。2012年のデータ(Time 1)、2013年のデータ(Time 2)として、震災後の2年間において、どのような要因が問題飲酒へと発展するのかを明らかにした。 【統計学的解析】 本研究では、2012年にCAGE<2とCAGE≥2の2つの群に分け、問題飲酒の要因を検討するためにχ^2検定を行った。2012年CAGE<2が2013年にCAGE≥2の群、2012年にCAGE<2で2013年CAGE<2であった群の2群に分けχ^2検定を行った。次に性別、年齢階級、健康状態、運動状態、生活習慣病関連、精神科の既往、睡眠状態、笑い、仕事の変化の有無、経済状態、精神健康度(K6)、トラウマ反応(PCL-S)、社会的孤立(LSN-6)、飲酒量でロジスティック回帰分析を行い、問題飲酒になる有意な要因を明らかにした。統計学的解析にSPSS for Windows version 24.0を用いた。 【結果】 男女共に、4ドリンク以上の多量飲酒(オッズ比2.26 95%信頼区間:1.82-2.80)とトラウマ反応(PCL-S≥44)(オッズ比1.75 95%信頼区間:1.33-2.31)は、2012年から2013年の問題飲酒になる要因であった。男性の避難住民においては、年齢(オッズ比1.29 95%信頼区間:1.00-1.66)、経済状態が苦しい(オッズ比1.81 95%信頼区間:1.36-2.42)、トラウマ反応(PCL-S≥44)(オッズ比2.16 95%信頼区間:1.58-2.95)が問題飲酒になる危	

険因子であった。一方で、女性の避難住民においては、過去の精神科既往歴（オッズ比 1.99 95%信頼区間：1.06-3.74）および、睡眠問題を有すること（オッズ比 3.01 95%信頼区間：1.59-5.66）が、問題飲酒につながる要因であった。

【結論】本研究では、震災後の慢性期に問題飲酒につながる危険因子には男女の差があることが分かった。男性では、4 ドリンク以上の多量飲酒、PCL-S が 44 点以上のトラウマ反応が高値であること、また経済状態が悪いことが問題飲酒の危険因子になることが示唆された。一方で、女性の避難住民では、4 ドリンク以上の多量飲酒、精神科既往の有無、睡眠問題を有することが問題飲酒の構築の要因であることが考えられた。したがって、複合震災後には、問題飲酒になる性差の違いを配慮した避難住民特有の防止対策を開発する必要がある。

【倫理的配慮】

本研究は、福島県立医科大学倫理委員会の承認を得て実施された。

※日本語で記載すること。1200字以内にまとめること。

学位論文審査結果報告書

令和元年 6 月 28 日

大学院医学研究科長様

下記のとおり学位論文の審査を終了したので報告いたします。

【審査結果用紙】

氏 名 上田 由桂

学位論文題名 Risk factors of problem drinking in the chronic phase among evacuees in Fukushima following the Great East Japan Earthquake based on a two-year cohort study: The Fukushima Health Management Survey.

(東日本大震災後の避難住民における問題飲酒になる要因：
2 年間のコホート研究 福島県県民健康調査)

災害は避難住民の飲酒量に影響し、また精神的なリスクに影響すると言われているが、具体的に災害前後の飲酒行動の変化と精神健康のリスクとの関連を分析している研究は少ない。実際、先行研究では、震災後に飲酒を始めた避難住民は精神健康が悪いこと、震災後に飲酒をやめた避難住民も精神健康が悪いことなどが示唆されているが、震災後の問題飲酒と精神健康の因果関係は明らかにされていない。そこで本研究は、震災 1 年後の 2012 年から 2013 年（震災後 2－3 年の変化）に着目し、避難住民の問題飲酒になる危険因子を明らかにすることを目的として実施された。

本研究では、①福島県県民健康調査で実施した「こころの健康度・生活習慣に関する調査」(2012 年度-2013 年度)で調査票を回答している者、②20 歳以上の回答者で慢性肝炎の既往がない者、③本人回答者のみとし、④CAGE (アルコールスクリーニング)の回答している者を対象として(回答者数:12,490 人 2012 年の一般回答率:29.9%) 後ろ向きコホート研究を行った。評価尺度として、問題飲酒は CAGE(Ewing, 1984), 精神健康は K6(Kessler et al., 2003), トラウマ症状は PCL-S(Iwasa et al. 2016; Suzuki et al. 2017)を用い、問題飲酒者と非問題飲酒者の間で身体・心理・社会的因子を比較、新規の問題飲酒者の身体・心理・社会的因子のオッズ比を単変量解析で算出、単変量解析で有意になった因子を多変量解析によって独立性を検討、問題飲酒のオッズ比 (95%信頼区間) を算出することによって、全体および男女別で解析し 2012 年から 2013 年にかけて新規に問題飲酒行動が出現した要因を検討した。

その結果、男女ともに睡眠問題と多量飲酒は問題飲酒形成の要因であったことが示された。問題飲酒の要因には性差がみられ、男性では生活のくらし向きの悪化とトラウマ症状が、また女性では過去の精神疾患の既往が問題飲酒の危険因子であったことが示されたという。

さらに、男性では震災後の生活のくらし向きの悪化から抑うつ傾向になり、結果として飲酒を対処法としたものと考按し、また女性では、長期の避難生活の状況で、特に対人関係の問題などからもともとの精神症状の悪化が原因で飲酒問題につながった可能性が高いと考察している。

本研究は、震災後の慢性期に着目することにより、震災後の避難住民の問題飲酒行動出現の要因を検討した初めての研究であり、今後大規模災害時に生ずる避難住民の精神衛生学的介入に有用な成果であると期待出来ることから、博士の学位授与に値すると考えられた。

論文審査委員	主査	黒田	直人
	副査	高橋	敦史
	副査	日高	友郎